Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-24

初期西田の思想における「選択意志」の自由と展開

田口，玄一郎

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,26:86-98

(Issue Date)
2014-11-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010329

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010329

初期西田の思想における「選択的意志」の自由と展開

田口 玄一郎

はじめに

本稿の目的は、西田幾多郎（1870-1945）の処女作『善の研究』（1911）の中に登場する「選択的意志」の重要性を示すことである。西田は意志を、一方で意識の原初的な統一性の内に捉え、他方で意識の理性的能動作用を担う働きと考えており、「選択的意志」はちょうど両者の中間・媒介として、「主客合一」が志向される手前に映し出された意識状態を意味する。以下では、『善の研究』とその周辺資料をもとに、またW.ジェームズ（1842-1910）とW.ヴント（1832-1920）の説明を参照しながら、「選択的意志」の実相と初期西田におけるその重要性を確認していく。

1. 西田の「主意主義」とは何の意か

西田哲学を語る上で「意志」の問題を避けて通ることはできない。新版『西田幾多郎全集』の編集者の一人である小坂国継が述べるように、西田の思索は知情意のうち意に比重を置く立場を始終保持し続けながら展開し、「主意主義的傾向は、ただ単に処女作『善の研究』のみならず、西田の全著作に通底した特徴である」(1) からである。

西田が意志を重視していたことは間違いないだろうが、意志と共に知的なものと情的なものの相互連関が確認される必要がある。というのも、西田にとって三者は密接に連動しているからであり (2)、その「主意主義的傾向」は決して意志一元論ではないからである。西田の思想傾向は厳密に主意主義にも主知主義にも分類できず、あえていえば“意志と理性が調和する立場”であり (3)、そのような前提より我々は、知情意がともに一である意識の経験とはいかなる事態を意味するのか、そのことを我々は西田の説明からいかに知りうるのだろうかを考えなくてはならない。意志と理性の協働経験が初期西田の基本的立場であったとすれば、「選択的意志」の可能性はまさにそこにあると思われる。

さて、まずは『善の研究』における「選択的意志」の主な説明を確認しておく、

a. 勿論選択的意志より見れば此の如く衝動的意志に由りて支配せられるのは反って意志の束縛であるかも知れぬが、選択的意志とは已に意志が自由を失った状態である故に之が訓練せられた時には又衝動的となるのである。(13)

b. 選択的意志といふが如きは寧ろ不完全なる我々の意識状態に伴ふべきものであって、之を以て神に擬すべきものではない。例へば我々が充分に熟達した事柄に於ては少しも選択的意志を入れるゝの余地がない、選択的意志は疑惑、矛盾、衝突の場合に必要となるのである。(147)

いずれの説明もきわめて消極的である。そのため、従来の研究ではその深い意味まで考究されることがなかった[(4)]。a については「衝動」との関連で後述するとして、b の内容から詳しくみていきたい。

この箇所は『善の研究』第四編第三章「神」からの引用である。宗教論、とくに「神」を論ずる場面で「選択的意志」が論じられた理由は、この引用が登場する段落全体を通じて人間の「意志の自由」が問題となっているからである。

西田は、「真の自由」とは「自己の内面的性質より働くといふ所謂必然的自由の意味でなければならぬ」と定義した上で、神は「万有の根本」である以上、「万物悉く神の内面的性質より出づるが故に神は自由」であり、この意味で「実に絶対的に自由」であると述べる。もし「自己の性質に反して働く」という場合があるならば、それは「自己の性質の不完全なるか或はその矛盾を示すもの」だという。以上の前提から、「選択的意志といふが如きは寧ろ不完全なる我々の意識状態に伴ふべきものであって、之を以て神に擬すべきものではない」という先の引用が導出される。わかりにくいが、西田は、神とは異なる人間（＝有限存在）が「自己の性質に反して働く」意識の不完全または矛盾を伴う存在であり、神の「絶対的自由」を比較対象として、人間の意志の自由が「選択的意志」であること、少なくともその可能性があることを示唆しているのである。西田の目論見は、意志の自由が矛盾的性質を有し、人間が神のように絶対に自由であることが不可能であることを論証するところにある。以上のような人間存在の基本的理解が西田の意志論にあることを我々は看過すべきではないだろう。

2. 意識の分裂と理想

意識が不完全であるということは、意識がその厳密なる統一性を離れ、意識内に矛盾衝突が生じることを意味する。西田にとってそのような不統一は、自然と対峙する「精神」において顕著となる。両者が互いに矛盾する時に明瞭に意識されるのが「意志」であり、それがより大いなる統一を目指す起点になると考えられる。この統一は最終的には精神の統一作用、厳密にいえば「自己の理想および情意の主観的統一」に基礎づけられ、「我々の理想及情意が深遠博大となるに従って、愈々自然の真意義を理会することができる」(71) といわれる。精神と相反しているかにみえる「自然」の内奥に主客合一の真の意義を「理会」しうるのは、西田によれば「情意」と等価な「理想」の意識なのである。「理想」を俟ってはじめて、「選択的意志」が可能になることを、我々は次の説明からうかがい知ることができる、

> 然るに意識現象は単に生ずるのではなくして、意識されたる現象である。即ち生ずるのみならず、生じたことを自知して居るのである。而してこの知るといひ意識するといふことは即ち他の可能性を含むといふことである。我々が取ることを意識するといふことは其裏面に取らぬといふ可能性を含むといふ意味である。更に詳言すれば、意識には必ず一般的性質の者がある、即ち意識は理想的要素をもって居る。(中略) 現実にして而も理想を含み、理想的にして而も現実を離れぬといふのが意識の特性である。(93-94：傍点は引用者)

西田によれば、「理想」とは「意識現象」の内に「他の可能性を含む」ものとして見出された特性を意味する。意識現象には、自然法則の影響により「生ずる」意識内容を含みつつ、そのように映された内容を「自知」する故に取らぬという選択の余地を残し続けるところに超越的意識があり[5]、これが理想といわれる。ちなみに、上掲の引用は『善の研究』第三篇第三章「意志の自由」からのものであるという点からも、ここで積極的に語られる「理想的要素」には「選択的意志」が深く関わっていると判断することができる。

3. ヴント心理学に基づく意志的動作の三段階

『善の研究』では消極的に扱われていたかに見えた「選択的意志」だが、実際には

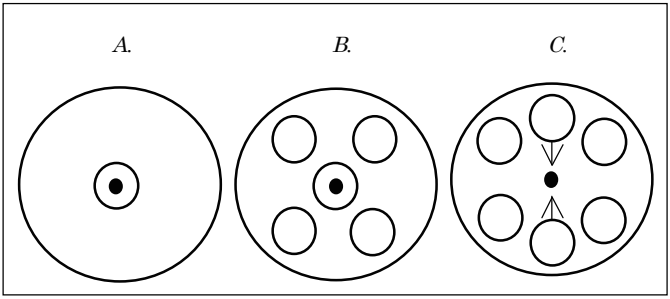
「理想」の名のもとに重要な意味をもつ概念であることが見えてきた。

ところで、『善の研究』以前に著された「心理学講義」[6]（以下、「心理」と略記）の一節「意志の種類」には、ヴントの『心理学要綱』に依拠したと思われる[7]「選択的意志」の原型がある。以下の三つの意志的動作は、『心理学要綱』第 14 章「意志の進行」の中に描かれた動機の表象図 *ABC* と完全に対応すると考えてよい、

西田「心理学講義」より（XIV, 510 参照）

衝動的動作（impulsive action, Triebhandlung）
執意的動作（volitional action, Willkür-(Vorsatz-)handlung）
撰択的動作（selective action, Wahlhandlung）

ヴント『心理学要綱』より[8]



ヴントの図解のうち、大枠の円形は意識の範囲を示し、その内部の小さな円形が動機、中央の点を含む円形が「決定的動機」（das entscheidende Motiv）を意味する[9]。この図解を参考に「心理」における三つの意志的動作の様態を詳しくみていくと、まず、「衝動的動作」とは、「意志的動作の最も簡単なる場合」に働くもの、すなわち「唯一の動機より起る者」であり、衝動からすぐに動作に移るような単純な運動と説明される。次に「執意的動作」と「撰択的動作」とは、両者とも「能動的注意」に従って働くものであり、前者が「有力なる動機は一つであるが外に之と争ふ数多の動機」がある状態から動作へ移る運動であるのに対し、後者は「有力なる動機が二つ以上」あ

るため「動機の競争（conflict of motives, Kampf der Motive）」が起き、この動機同士が相克する間で「思慮（deliberation, Ueberlegung）」が働く活動といわれる。たしかにヴントの図 *C.*をみると、「衝動的」や「執意的」の場合とは異なり、「撰択的」には動機同士の衝突という著しい特徴を表す二つの矢印が確認でき、前者二つに比べて最終的に決される有力な動機が不定のままであることもうかがえる。「動作」へと自然には移行せず、意識内で複数の動機が葛藤し合う心境が「撰択的動作」の開始条件なのである。

そして、西田によれば、この心境の中から「強き能動的注意の状態」に占領された「決断（decision, Entschliessung）」の意識、すなわち「feeling of fiat, Entschliessungsgefühl」が生ずるという。動機同士の相克という先行条件から一つの決定的な動機が最終的に決断されるまでの間に、意識の選択性の認識根拠として突如煌めくこの感情こそが「選択的意志」の内実にほかならず、西田は「意志の最発達したる者」と考えている。『善の研究』とその周辺資料との間にあるこの落差はいったい何なのか。『善の研究』冒頭の「純粋というのは、…毫も思慮分別を加えない」（9）という「純粋経験」の定義とはまったく対照的に、「選択的意志」の特徴は「思慮」を働かせることであり、また、純粋経験が「色を見、音を聞く刹那」であるのに対して、「この色、この音は何であるという判断」（9）を下す主体性こそが選択的意志なのである。

「選択的意志」は経験の純粋性から自立する主体性である。それは、衝動的のようにすぐさま「動作」を繰り出さずに、思考する自我の深みから、つまり、内から外へと繰り返す運動の開始を告げ、自然法則の結果動かされたのではなく、みずから表現せんと働くことを可能にする。そのように西田は考える[10]。

4. ジェームズの本能論と創造的理性

『善の研究』では消極的に、「心理」その他では積極的に示された「選択的意志」。表面的には「純粋経験」と相容れないようにみえるその特徴は、原初の衝動的意志から「最発達したる者」であるという点であり、実は純粋経験の分化発展時に立ち現れる純粋経験のまぎれもない一側面として理解される。そこで、我々の次なる課題は、選択的意志はいかに衝動から立ち現れるのか、である。これを解く鍵が、当時の西田が傾注したジェームズの『心理学諸原理』の「本能」論にある[11]。

「本能」の章には「すべての本能は衝動である」[12]と題された一節がある。その

中でジェームズは、「本能に従う動物にとっては、あらゆる本能のすべての衝動、すべての段階が、それ自身の十分な光をもって輝き、その瞬間において唯一の永遠に正当な行為と思われる」(13) と述べ、衝動的存在の正当性を第一に認めるべきと主張する。では、衝動的存在はすべて本能に従うほかないのかといえば、そうではない。たしかに、人間は他のあらゆる動物同様に、本能的な存在であり、「いかなる下等動物よりもはるかに多様な衝動をもっている」ので、衝動自体が働く限りは「盲目的」(14) といわざるをえない。だが他方で、ジェームズによれば、人間は記憶、反省力、推理力をもつために、ひとたび屈した衝動の結果を経験した後の衝動はいずれも、「その結果の予見と結合して感じられるようになる」ので、「すべての本能的動作は、記憶をもつ動物においては、一旦繰り返された後はもはや『盲目的』ではなくなるはずである」(15) として、「記憶」から結果を予見しうる人間はみずからの衝動に支配されることなく、逆に新たな習慣化を生み出すような経験をもつのだという。

この説明において、衝動と理性はまったく対等であり、元々の盲目的な衝動について考える立場 (16) が矛盾なく成立する。というのも、本能に従う動物の衝動が多様でありぶつかり合う人間においては、「結果をいつも通り決断している適用が個々特定の機会の内になされる『経験』」が蓄積されるゆえに、却って人間の合理的活動の中心である「躊躇選択の生活、すなわち知的生活」(17) が可能だからである。一見対立しているかに見える衝動と理性が実はともに協働的であるという事実の根拠としてジェームズが持ち出しているのは、「ある衝動を中和し得る唯一のものは反対方向への衝動」(18) であるという見方である。これは、「付加的な衝動あるいは命令 (the additional impulse or *fiat*)」(19) と呼ばれる「選択的意志」の存在根拠となるより高次の「衝動」を意味する。衝動においてより高次の衝動が働くためには「反対方向への衝動を起こすような想像を喚起する推論を行う」(20) ところの「理性」が必要といわれる。理性は衝動を支配するものではなく (21)、衝動から衝動へと回帰する際の“創造的な想像力”(22) を担うものだとジェームズは考える。元来の衝動が理性的に包摂され媒介される時に立ち現れるもう一つの衝動の正体とは、西田が「心理」の中で言及していたように *fiat*、つまりは「選択的意志」なのだ。

さて、翻って西田の「理性」の考えをみると、ジェームズよりも「意志」が強調されていることがわかる。ジェームズにとって理性は、あくまで衝動と衝動の中間で想像力を働かせる機能として考えられていたが、西田のそれは、「理性と意思との衝突

といふのは大いなる意思と小なる意思との衝突にすぎない」(断片十, 387) とあるように、一方の衝動的意志に対するより大いなる“理性的意志”と解される。「意志の本に理性が潜んで居るといへると思ふ。(中略) 意志は意識統一の小なる要求で、理性はその深遠なる要求である」(20) と『善の研究』の中で説明される「理性」は、原初の意志よりも深い次元から反省的に統一せしめる「意志」として鋳直されたものである[23]。「一なると共に多、多なると共に一、平等の中に差別を具し、差別の中に平等を具する」、「一の統一が立てば直に之を破る不統一が成立する」(57) と定義される「真実在」の「根本的方式」も、衝動性から理性へと深化発展する「意志」の循環構造の表現であろう[24]。西田にとって「理性」とは、意志の内に意志自身の衝突を含む不統一の底より自覚化された形而上学的な意志として、先行する不統一の内に新たな統一(上記では「平等」)を形成する創造的働きのことである。

5. ヴントの統一的衝動論

「理性」をめぐるジェームズと西田の考えには、元来の衝動から作られつつ作るものになっていくという“流れ”が共有されている。この流れに従って、前節で詳述した理性的意志の循環構造が形成される場所は衝動に於いてでなければならない。衝動の機能面を強調したジェームズとは別に、その構造連関に着目したと思われるヴントの説明に再び戻りたい。

前掲の図解 *A.*の「衝動的動作」の状況下では、「唯一の動機から立ち現れる単純な意志動作」[25] がみられるにすぎない、とヴントはいう。しかし、情緒 (Affekt) を構成する個々の感情要素が、我々の主観的把握によって無媒介に「表象」と結びつく際には常に、「意志の諸動機」(die Motive des Willens) が動作の起点として意識される。このように動機は表象と感情から構成されるのだが、ヴントはこれらに対応する二種類の動機、すなわち、前者を動因 (*Beweggrund*)、後者を主因 (*Triebfeder*) と呼び[26]、衝動 (Trieb) と感情は不可分であるとする。衝動的動作は「必然的に、あらゆる意志的動作が発展する起点」[27] に限りなく近い活動であり、しかもその主因は、上述のように、情緒の内で複合的に定立される諸動機の一要素でありながら、表象的に把捉される動因よりも「意志的動作を事前に用意する上で決定的に重要な意味をもつ」[28] のだといわれるように、衝動の内には意志的動作を誘導する根本的かつ決定的な動機が存するとヴントは考えるのである。

そして、この根本的動機に端を発する衝動的動作の、その構造上注目すべき最大の特徴は、「意志行為の主因はみずからを統一的な全体へ（einem einheitlichen Ganzen）結びつけ、その際に主因みずからを、支配的な〔感情的―引用者〕要素におけるような一つの主因のもとに従属させる」[29]といわれる点である。ヴントの衝動システムは、ジェームズのそれよりも組織的かつ体系的な印象を喚起させるような“主因の一元性”を基としており、このように理性の創造性よりも衝動の統一性にウェイトが置かれる所以は、意志による発展プロセスの「習慣化された成果」（Ergebnis der gewohnheitsmäßigen Ausführung）[30]が人間においては持続的に現れるからである。なるほど、『善の研究』の「選択的意志」が、(a)「訓練せられた時には又衝動的となる」、(b)「充分に熟達した事柄」と説明されていたのも、西田が衝動的意志の統一性というヴントの見地を踏まえ[31]、意志がみずからの内により大いなる統一性を見出すことにより、そこへと還相していくみずからの方向性または目的性をもって働く方途が拓かれると確信したからであろう。それは、具体的にいえば、「主観より働くのではなく、反って客観より働くとも見らるゝ」ところの「飲食起臥の習慣的行為」(27)へと訓練を積む経験を意味する。晩年、西田は「歴史的世界」を論じる際にメーヌ・ド・ビラン（1766-1824）やラヴェッソン（1813-1900）の習慣論を手がかりにしているが、その萌芽がすでに初期にみられることは注目されてよい。

6. 理性的意志の自覚構造における理と記憶

以上、西田の“理性的意志”の本質は「衝動」の統一性と「理性」の創造性であるが、それは決して自然法則に決定された結果でも、無からの創造を意味するのでもなく、元来の衝動から・へと目的的に意志の“流れ”が切り替わる時、それは成就する。その理由は、理性的意志の自覚構造の内にその形而上学的な働きが見出される時、意志は、外へ、ではなく内へと反省的に向かうからである。通常の意志する自我は未来志向であるが、過去へ遡って想起する自我がそれに先行する。西田は『善の研究』の中で、「心理学者のいふやうに、我々が運動を意志するにはたゞ過去の記憶を想起すれば足りる、即ち之に注意を向けさへすればよい、運動は自ら之に伴ふのである」(24)と述べ、外へ表出される運動は過去の記憶の想起によって現実化するとの見方を示し、「意志は一種の想起である」(26）とまで断言する。過去へ遡りうる「想起」の本性には、過去から現在への“流れ”を超越しうる意志―「memory = Vernunft + Wille

/Vernunft-über Zeit u. Raum」（断片七, 51）―の存在が看取されている。このような想起の超越性を通じて、西田は、「理」という名の実在世界を拓こうと考える[32]。

西田によれば、「理」とは意識の対象として見ることができないものである。ただ、「之［理其者――引用者］になりきり之に即して働くこと」により、それが「万物の統一力であって兼ねて又意識内面の統一力」であることが知られるという（61）。西谷啓治は、認識の枠組みを超えて経験の最中に拓かれる「理」の独自性を、西洋の伝統的な形而上学における「理」と対照させて評価する。後者が通常の「経験」の域を越えた普遍的理性の立場から探求され考えられたものであったのに対して、前者は、自己を没することによってはじめて考えうる「活ける眞の理」であり、そこでは「経験」の直接的な自明性と「理」の実在的な客観性とが新しく統一される立場が見出されると解しているが[33]、西田自身、「理」になり切る方法においては、おそらくプラトンの「想起説」を下敷きに、「記憶」の一般性に裏付けられた「思惟」の関与を認めている[34]。注（32）では、「想起」よりも低次元の「個人的主観」に属するとされ、『善の研究』では「真妄の別」（19）を含むといわれるほど「思惟」は消極的に考えられていたにもかかわらず、思惟する自我が何らかの仕方で想起する自我と共に真理を求む主体へ転換するのだろうか。いずれにせよ、高橋里美をはじめ多くの研究者が批判するように、『善の研究』では「思惟」の位置づけが曖昧であったのは確かであろう。とはいえ、「理」―それはまた「真の自己」―になり切るかどうかを決する“理性的意志”の自由の可能性を意識現象内に見出しえたことに、初期西田の思想における「選択的意志」の意義があったことは疑いえない。

まとめと今後の課題

本稿では西田の初期思想における「選択的意志」を問い、「我々の意識は…衝動を以て始まり意志を以て終わる」（49）という言葉の通り、それが衝動的意志から・へと意識が転換する際に働く能動作用であることを明らかにした。「選択的意志」の表現は多様であり、それが現実と対峙しながら意識内に別の可能性を呼び起こす場面では「理想」、現実とこの可能性を比較しどちらを選ぶかを「思慮」する場面では「理性」と語られ、さらに、先行的現実を保持する「記憶」において“逆流”するかのように「想起」が働く場面においてその力が顕著になることを、我々は西田の説明に即しながら分析を試みてきた。本論の中で指摘したように、意識に先行する現実をいっ

たん保持し再活性化せしめる「想起」と「記憶」の一般性を足場とする「思惟」が、再び、どのように現実へ働きかけるのかという問題まで西田自身の考察が及ばなかったことが、初期思想の限界であったと思われる。とりわけ、そのことは、我々があることを初めて経験するたびに迫られる深刻な事態、すなわち、「記憶」をもつ我々の意識は、過去から現在までの時制の中であらゆる可能性を探り始めつつも、「一度経験せざる動作は直に之を為すことはできぬ」（XIV, 509-510）ゆえに、直にはできない不自由さを経験するという根本的な問題において顕在化する。意志する自我の経験においては常に“想定外”の事態が起こりうるものだからである。「一種の想起」とみなされた西田の「意志」は、最後まで伝統主義の域を超え出られなかったのだろうか、それとも、過去の歴史からは今なお学ぶべき未来への指針を我々は期することができるのか[35]。昭和十一年、「今日から見れば、…心理主義的とも考えられる」（3）と初期のみずからを反省する西田の言葉は、すでにこの問題に取り組み続けてきた思索経験のもと確立された「西田哲学」の歴史を物語っており、それだからこそ我々は、初期西田にはどのような問題が内在していたのかを問い直す必要があるのである。

註

(1) 小坂国継『善の研究 全注釈』（講談社学術文庫、2006）482 頁。

(2) 「真の意識統一といふのは我我を知らずして自然に現はれ来る統一無雑の作用であって、知情意の分別なく主客の隔離なく独立自全なる意識本来の状態である」（121）。なお、『西田幾多郎全集』からの引用はすべて、新版（岩波書店、2003）に基づき、「純粋経験に関する断章」（以下、「断章」と略記し、巻数の代わりに断片数と頁数を文中に併記）以外は巻数と頁数を併記し、『善の研究』が収録された第一巻からの引用は頁数のみを記す。

(3) 哲学者紀平正美が『哲学雑誌』（第二四二号, 1907）の中で「実在に就いて」の著者へ贈った推奨の辞には次のような興味深い印象が述べられている、「…哲学は最も具体的な学問である。抽象的なる自然科学の様な普通は得て望む〻べからず、要はあらゆる思想を満足に組織立てると言う事が哲学の真理である。斯る考えの上に於て余輩は本誌の前号に於て西田氏の実在論を登載し得た事を非常に栄誉と感ずるのである。（中略）余輩の拝読した所では、氏の実在論は最もよくヘーゲルと近時八ヶ間敷い純粋経験説、換言すれば主知説と主意説とを調和せられた者と思う」（竹内良知『西田幾多郎』（東京大学出版会、1970）199-201 頁参照、傍点は引用者）。紀平自身は四高時代に西田の授業を受けた生徒の一人であり、

批評ではなく賛辞にとどまっているが、『善の研究』に対する最初の批判として有名な高橋里美（1886-1964）の「意識現象の事実とその意味（西田氏著『善の研究』を読む）」（1912）に先んじて、西田の実在論の内に「主知説と主意説とを調和せられた者」を“はじめて”垣間見たという歴史的事実の意味するところは大きい。

(4) 筆者の知る限り、湯浅泰雄が唯一踏み込んだ説明を加えている（『湯浅泰雄全集第十巻』（白亜書房、1999）533 頁参照）。もっとも、「西田によれば、カント的意志は『選択的意志』であって、真の自由を失ったものである。彼のいう純粋経験的意志は…『衝動的意志』である」という解釈は不十分であり、後述するように、西田の意志は衝動的であると共に選択的であるといわなくてはならない。「断章」のある箇所では「選択的意思に於て決定の時は直接経験である」（断片七, 53）とまでいわれている。

(5) 小坂もこの箇所に「選択」の可能性があると指摘する（小坂国継『西田哲学の研究』（ミネルヴァ書房、1992）93 頁参照）。

(6) 西田が教鞭を執っていた第四高等学校時代に講義用ノートとして作成された。執筆年代は 1904-1905 年と推定される（XIV,「後記」参照）。

(7) 務台理作（旧版『西田幾多郎全集 第十六巻』「心理学講義」の「後記」、666-667 頁参照）。

(8) W.Wundt, *Grundriss der Psychologie*. Leipzig, 1922, S.225.

(9) *ebd*. S.226.

(10) 「この二者〔意志と動作―引用者〕の関係は原因と結果との関係ではなく、寧ろ同一物の両面である。動作は意志の表現である」（90）。

(11) 「倫理学草案二」の一節「善一般（主意説）」には、「ゼームス氏本能・情緒・意志の論を参考せよ。」という欄外記述がある（XIV,593）。ジェームズの西田への影響としてしばしば取り上げられる「意識の流れ」（the stream of consciousness）と「縁暈」（fringe）（『善の研究』でも言及がある（15・36・53））以外に、ジェームズ『心理学諸原理』の最後を飾るこれら三つが西田の「意志」概念に与えた影響は無視できない。

(12) W. James, *Principles of Psychology*, vol.2, Dover Publications, 1950, p.385. 邦訳は短縮版の『心理学』（今田寛訳、岩波文庫、1993）227 頁。

(13) *Ibid.*, p.387. 邦訳 230 頁。

(14) *Ibid.,* p.390. 邦訳 231 頁。

(15) *Ibid.*, p.390. 邦訳 231 頁、傍点は原本イタリック。

(16) ここで言いたいことは、西田がジェームズから次のように学んだように、衝動的意志はそ

れ自身と反省的に関わるということである、「意思は自身の運動についての知識とみることもできる。ゼームスのいった様に意識は自ら衝動的であって我々が自己の運動を一心に想起すれば自ら運動を起すのである。（勿論自己の運動を客観的にみることもできる）（断片七, 54）。

(17) James, *op.cit.*, p.392-393. 邦訳 235 頁（一部改訳）。

(18) *Ibid.*, p.393. 邦訳 235 頁。

(19) *Ibid.*, p.527. 邦訳 273 頁。fiat はジェームズの意志論の中心概念の一つであるが、前掲の「心理」の動作区分の中ではヴントの Entschliessung に対応する英単語として使用されている。務台は、1896 年にヴントの「心理学要綱」初版が発刊され、そしてその英訳版も間もなく発刊されたことから、「このばあい先生は獨・英両訳書を参照されたのではなかったろうか。というのはヴントからの引用には英語が多いからである」（務台、前掲書、666 頁）と推定している。西田が両思想家の概念をどのように受容し理解したかという問題まで本論では立ち入ることはできないが、近代日本思想史の展開の中で彼らが与えた影響は無視できない。

(20) James, *op.cit.*, p.393. 邦訳 235 頁、傍点は原本イタリック。邦訳では動詞「行う」（make）まで強調されているが、原文ではそうでない。

(21) 「理性そのもの（*per se*）はいかなる衝動も抑制することはできない」（*Ibid.*, p.393. 邦訳 235 頁、傍点は原本イタリック）。

(22) ジェームズは想像の特徴を二種に分け、「その模写がありのままであるときには『再生的（‘reproductive’）』と言われ、異なる原材料からの諸要素が新しい全体をつくるように再び組み合わされる時には『創作的（‘productive’）』と言う」（*Ibid.*, p.45. 邦訳 104 頁、一部改訳）と述べ、別の個所の「経験的思考は単に再生的であるのに対して、推理（reasoning）は創造的（productive）なことである」（*Ibid.*, p.329-330. 邦訳 173 頁）という説明と対応させている。

(23) 西田の貴重な小論「私の主意主義の意味」では、「理性の立場といふのは、我々が自覚に於て無限に自己を省みる如く、超越的意志が無限に深く自己の内に省みる反省的方面」（XI,139）といわれるように、西田にとって「理性」は意志における「反省」の超越性を意味する。

(24) 上田閑照は、「実在の根本方式」の中で表現された「と共に」には、実在の分化発展が具体的に充実されてゆく自動不息の運動の根拠があると解釈する（上田閑照『西田幾多郎を

読む』（岩波セミナーブックス、1991）152 頁参照）。反論するつもりはないが、この前置詞の厳密な意味は「選択的意志」の可能性と捉えるべきである。

(25) *Wundt, a.a.O.* S.224. 傍点は原本隔字体。

(26) *ebd.* S.222. 傍点は原本隔字体。

(27) *ebd.* S.224.

(28) *ebd.* S.223.

(29) *ebd.* S.222. 傍点は原本隔字体。

(30) *ebd.* S.224.

(31) 「而して意識は凡て衝動的であって、主意説のいふ様に、意志が意識の根本的形式であるといひ得るならば、意識発展の形式は即ち広義に於て意志発展の形式であり、その統一的傾向とは意志の目的であるといはねばならぬ」（13：傍点は引用者）という一文の中の所有代名詞は、西田がヴントの考えを念頭に説明したとすれば、「衝動」を意味すると推定される。

(32) 「思惟と想起との差異は、前者は事実であって、後者は一般的理である。併し換言すれば、前者は個人的主観（時間、空間上の）の統一であって、後者は一般的主観の統一であるといふことになる」（断片七,51）。

(33) 『西谷啓治著作集 第九巻』（創文社、1987）139-149 頁参照。

(34) 「記憶より思惟に移る時には一般的主観（人類一般の経験の結合）が働いてくる。記憶は範囲が狭いが生きてをる。プラトーのいった様に、思惟は一般的自己の記憶であるといってよろしい」（断片七, 51）。

(35) 西田は「日本文化の問題」（1940）の中でいみじくも次のように述べている、「新しく創造せられるものは、過去のものに同時存在的に生ずるのである。そこに真の人間の自由があるのである。創造に於て、人間は過去を受けると共に過去を変ずると云ふことができる」（IX, 81）。

（本学人文学研究科博士後期課程）